

とくしま 見 発 再 物 建

①



渦巻き型の窓が目を引く階段室。徳島の風土的モチーフを表現している



設計者・西山卯三が、かつて新町川河畔に立ち並んでいた「蔵の風景」を継承しようとした県郷土文化会館。蔵を抽象化した建物の下の巨大な半屋外空間から公園、街へとつながっている

縄文的異形の情感漂う

「京都のまち(わ)に反対」この建物は、際立った特徴をしたのが西山卯三(にしやま とうぞう)京都大学名誉教授。西山教授は証言に立った翌日、くも膜下出血で倒れ、五十数日後の一九九四(平成六)年四月に八十三歳でこの世を去る。この時の証言は「歴史の景観を守り、住み続けられるまちづくりに取り組みたい」と立ち並んでいた、かわら屋根と白壁の美しい蔵の風景を継承する試みだ。三階から上最後のメッセジとなった。この人が徳島県郷土文化会館の設計者だ。

県郷土文化会館

現在、JR京都駅は巨大なびょうぶのようなホテルとデパートに建て替えられている。その京都駅ビル改築をめぐる、かつて全国的な景観論争があった。当時、改築に対

西山卯三は、日本の建築界の今日を築いた中心的学者の一人であり、さらに地域に量感のあるマッス(塊)研究、環境を守る運動、町並み保存運動などの活動を展開した市民派の学者建築家だ。

西山卯三は、日本の建築界の今日を築いた中心的学者の一人であり、さらに地域に量感のあるマッス(塊)研究、環境を守る運動、町並み保存運動などの活動を展開した市民派の学者建築家だ。

また、「地域に根ざし、住む人、使う人の立場に立って設計する」ことを追求した西山が造ったのが、量感のあるマッスの下の巨大な半屋外空間だ。二階吹き抜けはこの

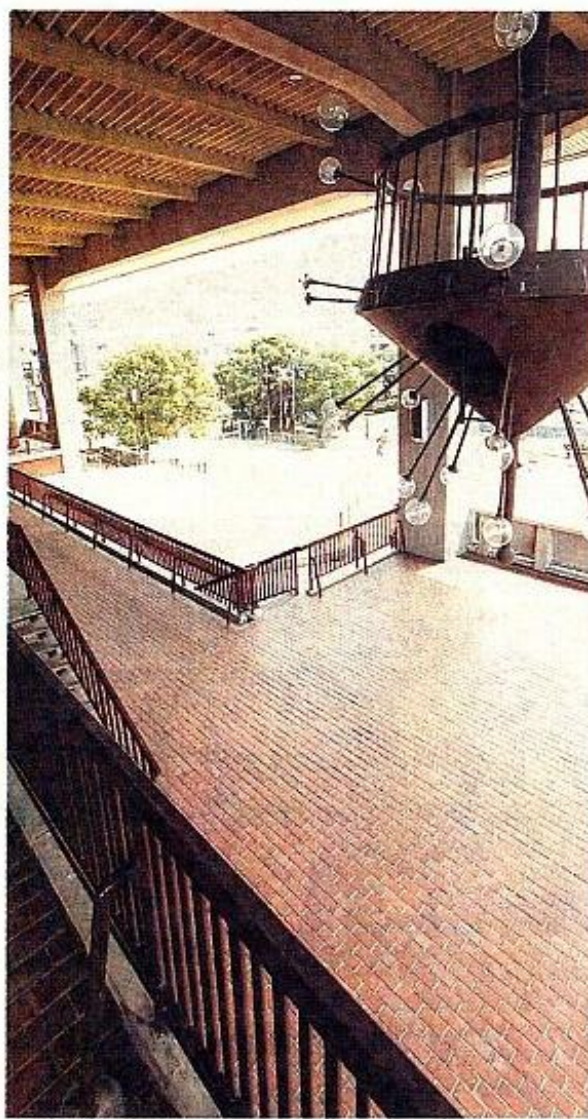
また、「地域に根ざし、住む人、使う人の立場に立って設計する」ことを追求した西山が造ったのが、量感のあるマッスの下の巨大な半屋外空間だ。二階吹き抜けはこの

また、「地域に根ざし、住む人、使う人の立場に立って設計する」ことを追求した西山が造ったのが、量感のあるマッスの下の巨大な半屋外空間だ。二階吹き抜けはこの



また、「地域に根ざし、住む人、使う人の立場に立って設計する」ことを追求した西山が造ったのが、量感のあるマッスの下の巨大な半屋外空間だ。二階吹き抜けはこの

2階吹き抜けの巨大な半屋外空間。階段が広場に向けて下り、青島公園につながっている。照明オブジェも珍しい。



また、「地域に根ざし、住む人、使う人の立場に立って設計する」ことを追求した西山が造ったのが、量感のあるマッスの下の巨大な半屋外空間だ。二階吹き抜けはこの

とくしま 見 発 再 物 建

⑥

昭和三十年代、小学生の私は、今は新聞放送会館が建つところにあった徳島市営プールに泳ぎによく通った。そのころは海も美しく、白砂青松の沖洲海岸にも同じくうららかな海と空の澄みは、プールには高い、モダンな形の飛び込み台があって、そこから時折、選手が飛び込むシーンを

見ると、何かしら別世界への入り口が、そこに建っているような胸のときめきを感じるようなところがあった。そして、その飛び込み台のほうは、モダンな形の徳島森林管理署(当時徳島森林管理署)があった。水平な形の徳島森林管理署と、垂直な飛び込み台の二つの白いモダンな建造物が響き合っているか、未来的な雰囲気を辺りに漂わせているのが少年の心にも鮮烈だった。

当時、道路は助任川の右手で止まっていた、車が走るメイン道路はお堀端の道路だった。そのため、道路はガランとした広場のようなものであり、アメリカふうの飾り立てられた大きなアメリカ車が何台か駐車していたり、道沿いにはバレエ教室などもあったりして、好奇心を刺激する不思議な通りであった。四十年の歳月を経て辺りは一変したが、徳島森林管理署は、モダンなムードの乾いた清流(れつ)な叙情をたたえた美しい建築として

徳島森林管理署

「外観的無重量性」にあるが、この建築はこれの特徴を明瞭に表現している。この特徴を明瞭に表現している。この特徴を明瞭に表現している。

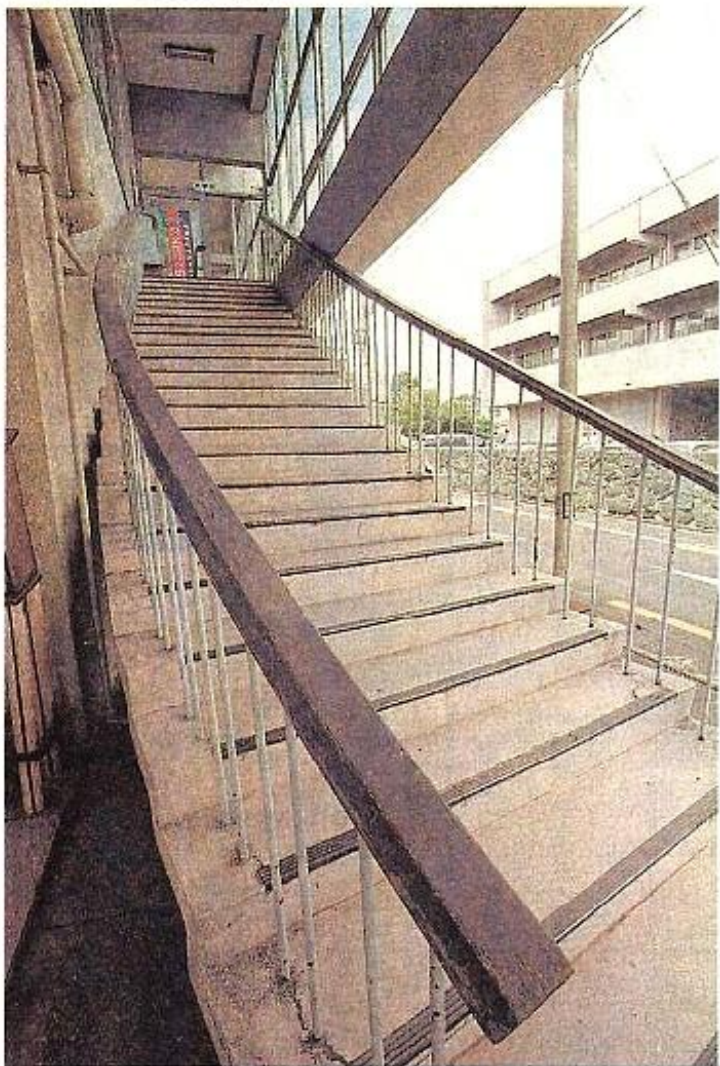
色あせぬモダンリズム

「外観的無重量性」にあるが、この建築はこれの特徴を明瞭に表現している。この特徴を明瞭に表現している。この特徴を明瞭に表現している。

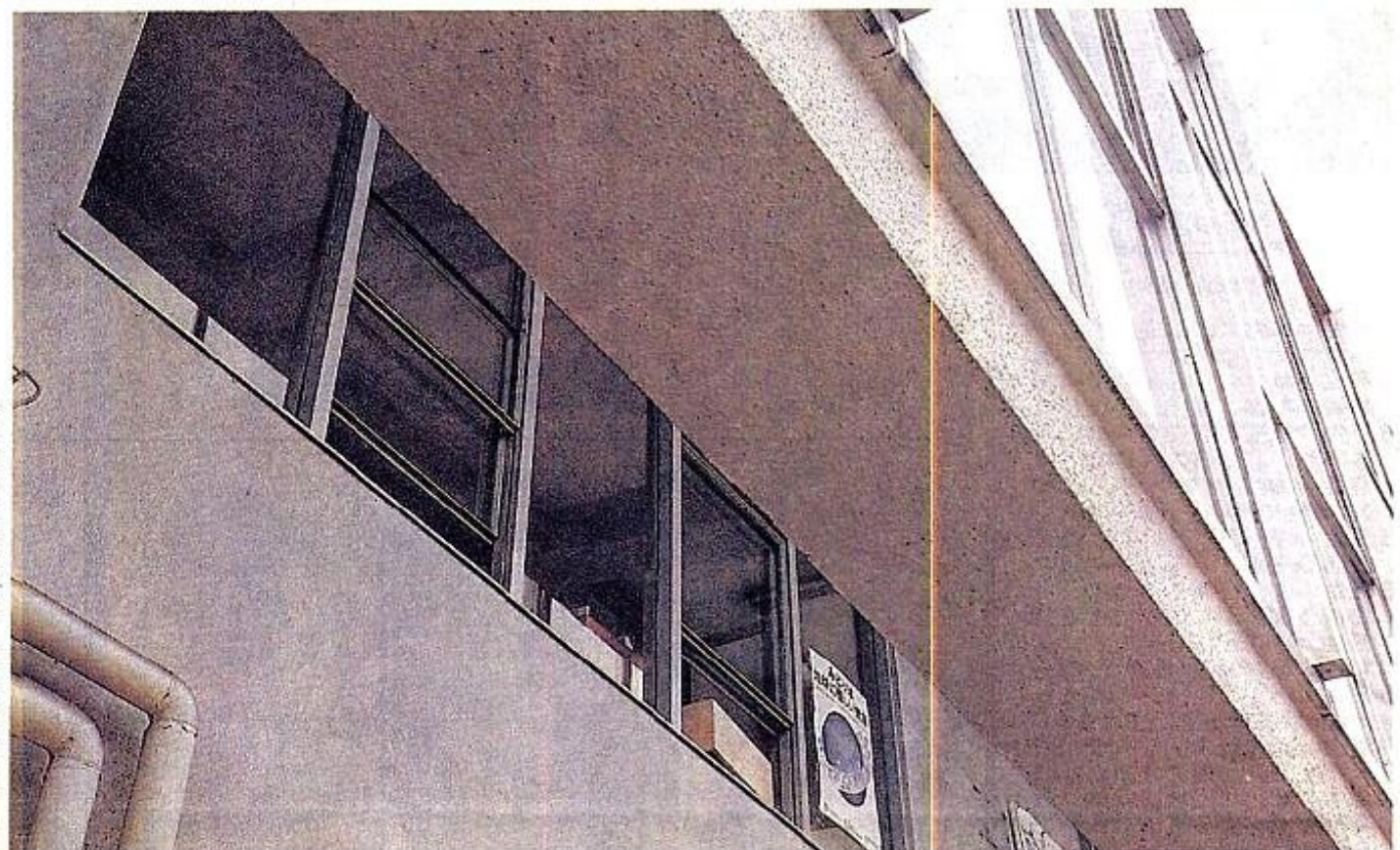
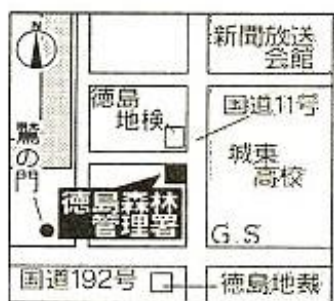
「外観的無重量性」にあるが、この建築はこれの特徴を明瞭に表現している。この特徴を明瞭に表現している。この特徴を明瞭に表現している。



「透明性」「視覚的明るさ」「外観的無重量性」が表現された徳島森林管理署。築後40年とは思えぬモダンな姿だ



2階への階段は微妙な曲線を描いて、階段だけが浮いているように見える



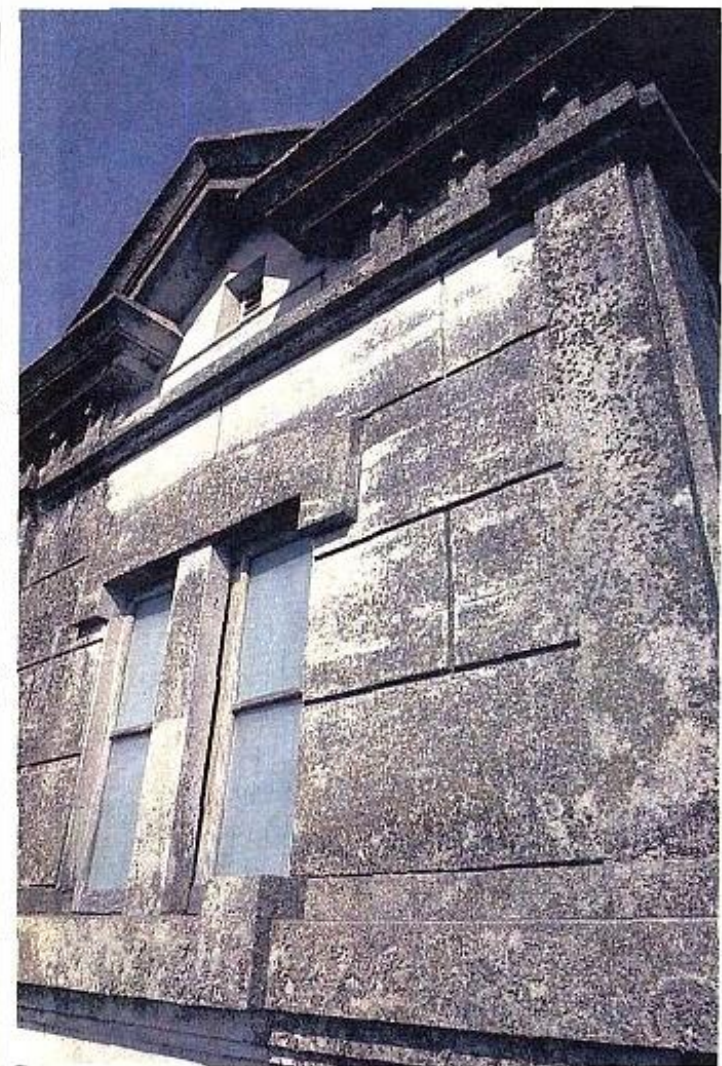
外壁の窓の奥に、もう一つ外壁と窓がある。最近流行のスケルトンデザインの原型だ

以上見てきたように、徳島森林管理署のモダンリズムデザインは、現在も全く色あせない良質のものだ。表は、戦後初期の霞の白いモダンリズム建築は、日本では数少ない。徳島森林管理署は貴重な文化財と考えられる。しかも、今も十分現役で使用されていることが、戦後モダンリズムの持続可能性を証明している。この建築は、徳島の魅力のある都市文化の蓄積に欠かすことができない。今後も末長く徳島の街に存在することを願う。(野々瀬徹・日本建築学会会員 徳島市中徳島町2、写真 末瀬弘太)

このシリーズは毎月第4土曜日に掲載します。

とくしま 見 再 発 物 建

青々と水をたたえた吉野川とかなたの青い四国山脈をバックにして建つこの第十樋門。水尺小屋は、ヨーロッパの湖城の塔のようなたたずまいで、魅力的な一枚の風景画となって道行く人を楽しませてきた。多くの人が、この小さな建物を気にとめて、いろいろな印象を心に刻んできた。それは、ライン川の川下りの光景などをとことくなく理想させ、ロマンチックな旅情をかき立てられるからだろうか。



コンクリートによる石積み風の精巧なつくり。重厚さが漂う

そのことは、近年、一見水尺小屋の基礎地盤に見える青石の石垣が壊れたにもかかわらず、上部の水尺小屋に影響がなかったことでも分かる。石垣は基礎井戸をカバーする飾りではあるが、真行を使うことでこの水尺小屋が徳島の大地に根付いた景観となっていて好ましい。

このシリーズは毎月第4土曜日に掲載します。

あるいは、精巧で独特な形態に強い印象を受けるところからだろうか。ランドマークとしての存在感は圧倒的である。

なぜのようなデザインの小屋が造られたのだろうか。建設されたのは、一九二三年(大正十二)年だから約八十

年前の昔だ。当時は昨年九月に紹介した徳島森林管理署のようなモダンなデザインは、実験的な試みが始まったばかり。欧米でも様式建築が全盛

であり、日本も、西洋様式を取り入れた擬洋風建築が建てられていた時代であった。徳島の美しい構築物となっていた(後から付け加えられた樋門上のスレート造り上屋は除

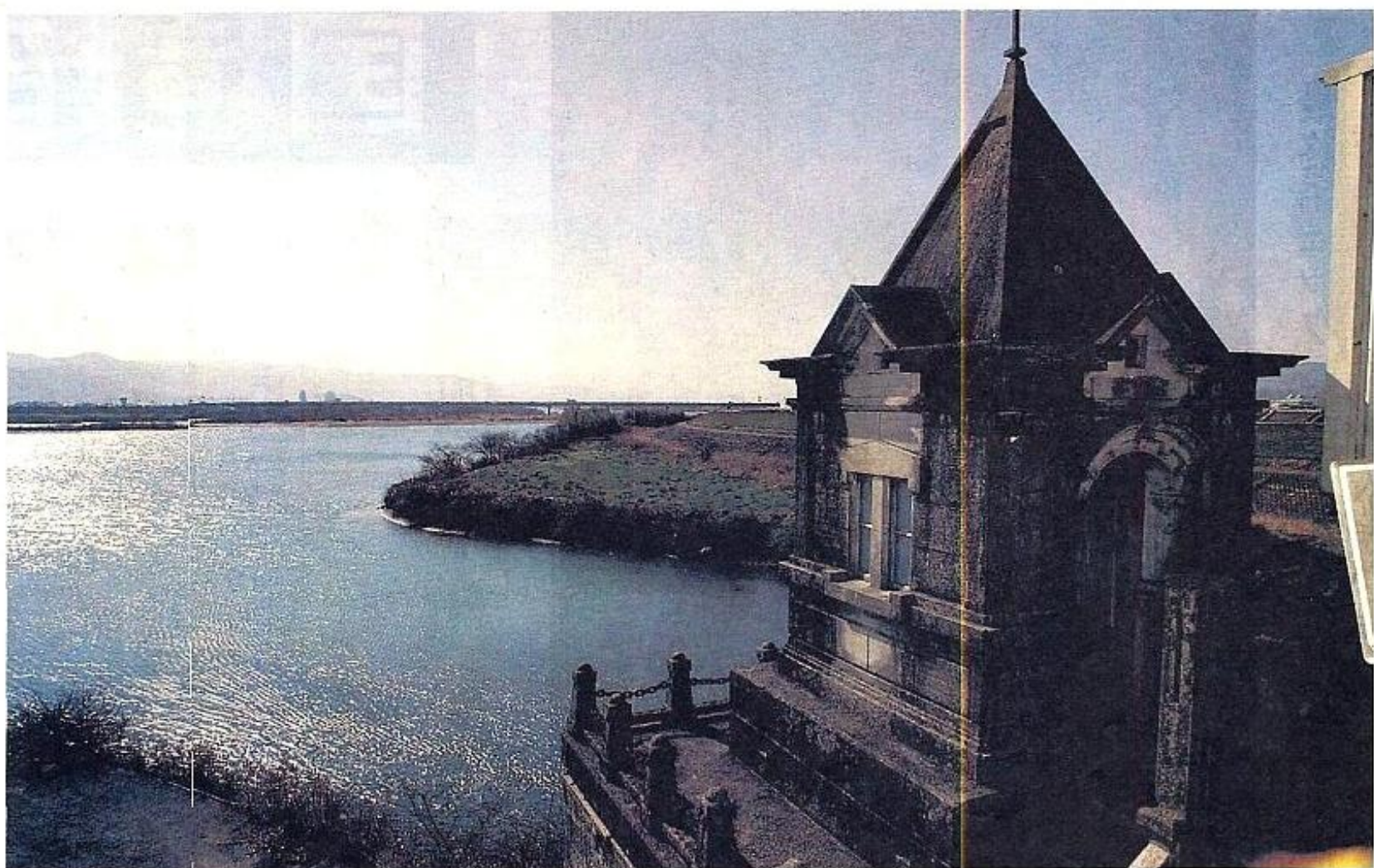
く。水尺の意味は、日盛りを刻んで水位の高さを測る(クリートによる石積み風の重厚なデザインであり、樋門と水尺小屋全体で擬洋風デザインらしい構築物となっていた)島では、ほぼ同時に佐吉配る(後から付け加えられた樋門上のスレート造り上屋は除

人自記水位計である。この水位計を設置する目的で造られた小屋なので水尺小屋と呼ばれる。構造的な強さは、水位測定のための施設だから樋門と同等であることが必要とされたのだらう。従って、樋門と同様の深さに頑丈なコンクリート製の基礎井戸を埋め、それを水尺小屋の床まで立ち上げ、その上に小屋を建てている。だから、南海道地震など大きな自然災害にもしっくりと耐えている。

画が進んでいる。貴重な文化財が一つよみがえることになり。歴史あるものを一つひとつ大事にしていく努力が大切な時代となっている。(野々瀬・日本建築学会会員 徳島市中徳島町二、写真は末澤私木)

第十樋門水尺小屋

湖城の塔のたたずまい



美しい湖城の小さな塔のような景観を醸し出す第十樋門の水尺小屋。その存在感に圧倒される

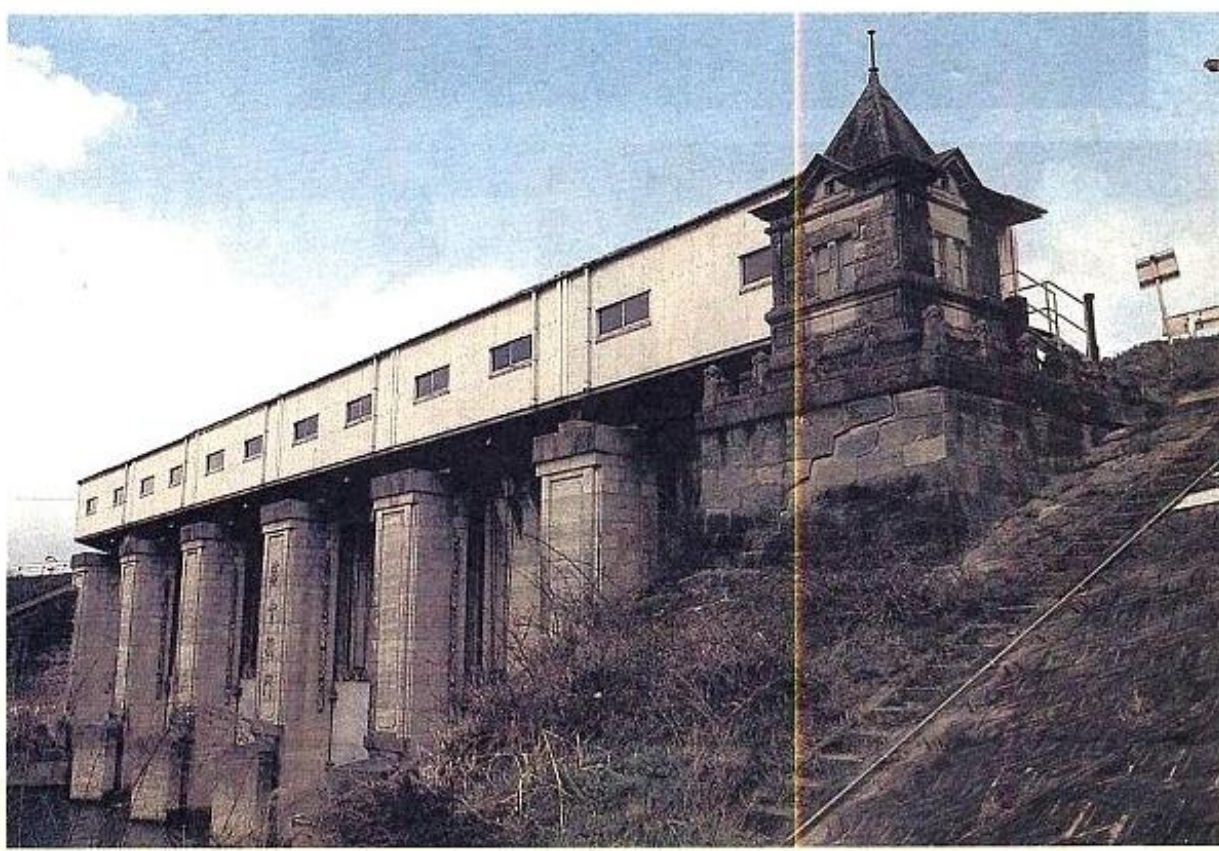
〈メモ〉吉野川第十樋門水尺小屋 上板町第十新田。1923年完成。旧内務省設計・施工。鉄筋コンクリート平屋建て6平方メートル。...



水尺小屋は横の第十樋門の付属施設だ。この樋門もコンクリートによる石積み風の重

さされた旧徳島県庁舎、三河郡などの擬洋風の建築が建てられている。こうした擬洋風デザインが流行した同時代性の中で水尺小屋は造られたと推定される。

理由は二つある。一つは、精巧な工芸品のような建築つくりを志した職人さんの当時の技術力の高きである。いまひとつは、築後約八十年を経た今でも小さなひび割れもなく、年月とともにコンクリート素材が持つ好ましい味わいを深めている点である。



水尺小屋と樋門(上屋は除く)が一体となって擬洋風デザインの美しさを演出している



旧県庁舎の建材を再利用、イメージを保存した擬洋風建築の県立文書館。風格を醸し出すテラコッタに目を奪われる

とくしま
建物再発見



徳島市八万町を流れる瀨川、近代美術館・博物館な瀨川の土手から対岸の「文」の現代建築群から東に少「た」ずんでいるのを目にする。「森」を見ると、県立図書館と離れて、端正な擬洋風建築の徳島県立文書館である。

県立文書館

近頃は、垂直性を強調した風格を醸し出すテラコッタ(屋上や玄関石組みの上の陶器製の屋根飾り)、パレット(屋上などにみられる低い手すり壁)軒庇陶器瓦などによる特徴的な屋根部分のスカイラインに目を奪われる。さらに行くにつれて、正面灯籠の設置台、車寄せ部分の紫雲石の壁面、正面灯籠の設置台、玄関ポーチの石組み、車寄

旧県庁舎の風格醸す



せの緑石など、石工の精巧で見事な職人芸の装飾が目を見せつける。

タンキール(南洋材)製のドアを抜けて、玄関ホールに入ると重厚な階段がある。濃いブラウン色のタンキール製の手すり、踊り場の腰壁テラコッタなど見事な装飾が来訪者を迎える。このような擬洋風建築の美質である見飽きないディテール(細部)の飾りは旧徳島県庁舎の建材である。

県立文書館は、一九八九年に建てられた比較的新しい建物であるが、「県庁舎の保存を」という市民の要請にこたえて旧県庁舎の建材を再利用、イメージを再現して建てられたものとされる。設計の基本は、旧県庁舎のシンボルであった正面玄関部に、それぞれ三十三段ほどあった左右の庁舎を縮小して両端を結合させたものであった。玄関の規模、正面玄関の幅などは旧庁舎とほぼ同寸としているが、奥行き、踊り場、階段などは縮小されている。旧県庁舎は、鉄筋コンクリート三階建てで一九三〇(昭和五)年に完成している。関東大地震の後、耐火建築として急速に発達した鉄筋コンクリート造りの初期のもので、設計者は旧国技館、学士会館などの設計で知られる佐野利器博士。昭和初年の日本を代表する建築史上重要な建造物の一つであった。

旧県庁舎は、北側の新町川に正面玄関を向けて建てていた。川辺の景観的な特性を生かし、河畔越しに見て美しいことを考慮してデザインしたのだろうか。パリ、ロンドンなど西欧の街では河畔沿いに道路があり、川越しに見る街の美しい景観づくりが巧みである。それに学び、擬洋風の旧庁舎を川に正面させたことと推測する。事実、旧県庁舎前の河畔にヨットが停泊する風景は、一幅の絵となつて多くの市民から愛されていた。

徳島県民が明治以後にようやく造つたいわば「近代の城」のような旧県庁舎は、太平洋戦争の戦災を越えて残り、県民にとって大切な心象風景ともなっている。空襲で戦前の建築の多くが焼失した徳島において、街の歴史的文化的蓄積を代表する建物だった。このような旧県庁舎を現庁舎に立て替える計画に対して、市民から熱烈な庁舎保存運動がわき上がった。市民の旧庁舎保存の主張は、現地での保存であった。西欧では、建物が建っている所で保存再利用することで、歴史的な文化と現代生活とを共存させ、魅力のある街並み文化を形成してきた。徳島の街づくりもそうあるべきだという主張があった。

△メモ▽県立文書館 徳島市八万町向香山。鉄筋コンクリート4階建て延べ1780平方メートル。1989年完成、90年開館。1階は事務室、研究室など、2階は閲覧室、講座室、展示室など、3階は収蔵庫、4階は機械室。



【上】玄関ホールから2階に通じる階段。魅力あるタンキール製の手すりは旧県庁舎のもの【右】玄関部は、石材、天井、照明などが入念に細工され、デザインとディテールが美しい

現地での保存ができなかったことは、一級の街並み文化を形成する機会を損失として課題を残したが、歴史的文化的に価値のある文書館を収蔵・保存して未来に伝える文書館の建物として保存されたことは、使われ方、建築文化の保存継承という点で、一つの見識が示されたといえる。(野々瀬徹・日本建築学会会員、徳島市中徳島町二、写真は末澤弘太)

このシリーズは毎月第4土曜日に掲載します。

とくしま 見 再 発 物 建

徳島公園広場に徳島市文化センターが建てられたのは一九六三(昭和三十八)年であった。以来三十八年、県内にも多くのホールが造られたが、今も徳島の音楽、演劇、イベントなどのホールとして市民、県民の人気は高い。それは約75%という高い年間利用率で分かる。この建物は蔵の門、江戸時代の青石積み、石垣と抱擁に徳島城をしのばせる歴史的な景観と、立



白タイル張りの大壁が透明ガラスの上に浮いているようなファサードデザイン。イベントホールとして高い人気を誇っている

徳島市文化センター

体交差道路を挟んで建ち、昭和が残した徳島の現代的景観の顔となっている。

モダンなデザインの外観

を特徴づけているのは、規則正しく並ぶ九枚のスレン

「1」の手法で外観演出



1、2階ロビーと外部ポーチをつなぐ弧状の階段。躍動感が目を引く

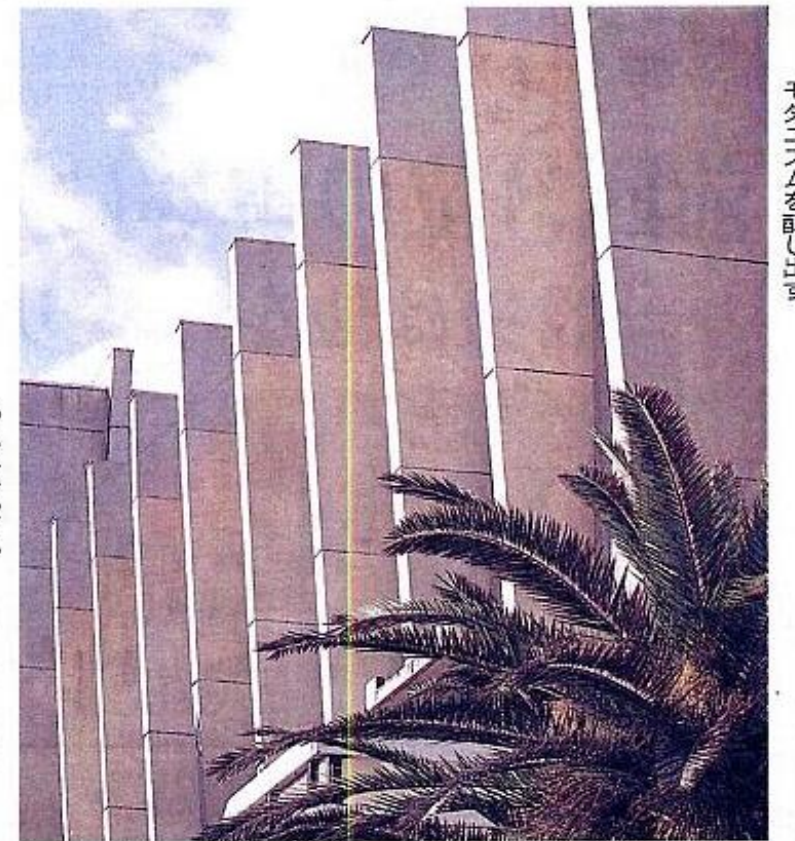
を特徴づけているのは、規則正しく並ぶ九枚のスレン

を特徴づけているのは、規則正しく並ぶ九枚のスレン



の目に浮いているようなデザインとして。この南と北の外観の構造を露出するデザインと、ファサードの外観構造から分離した自由な立面構成の二つのデザイン手法ともモダンな空間を醸し出している。

コンクリート打ち放しの柱と梁が規則正しく並ぶ特徴的なデザインがモダンな空間を醸し出す



4土曜日に掲載します。

二このシリーズは毎月第

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

二、写真は末澤弘太

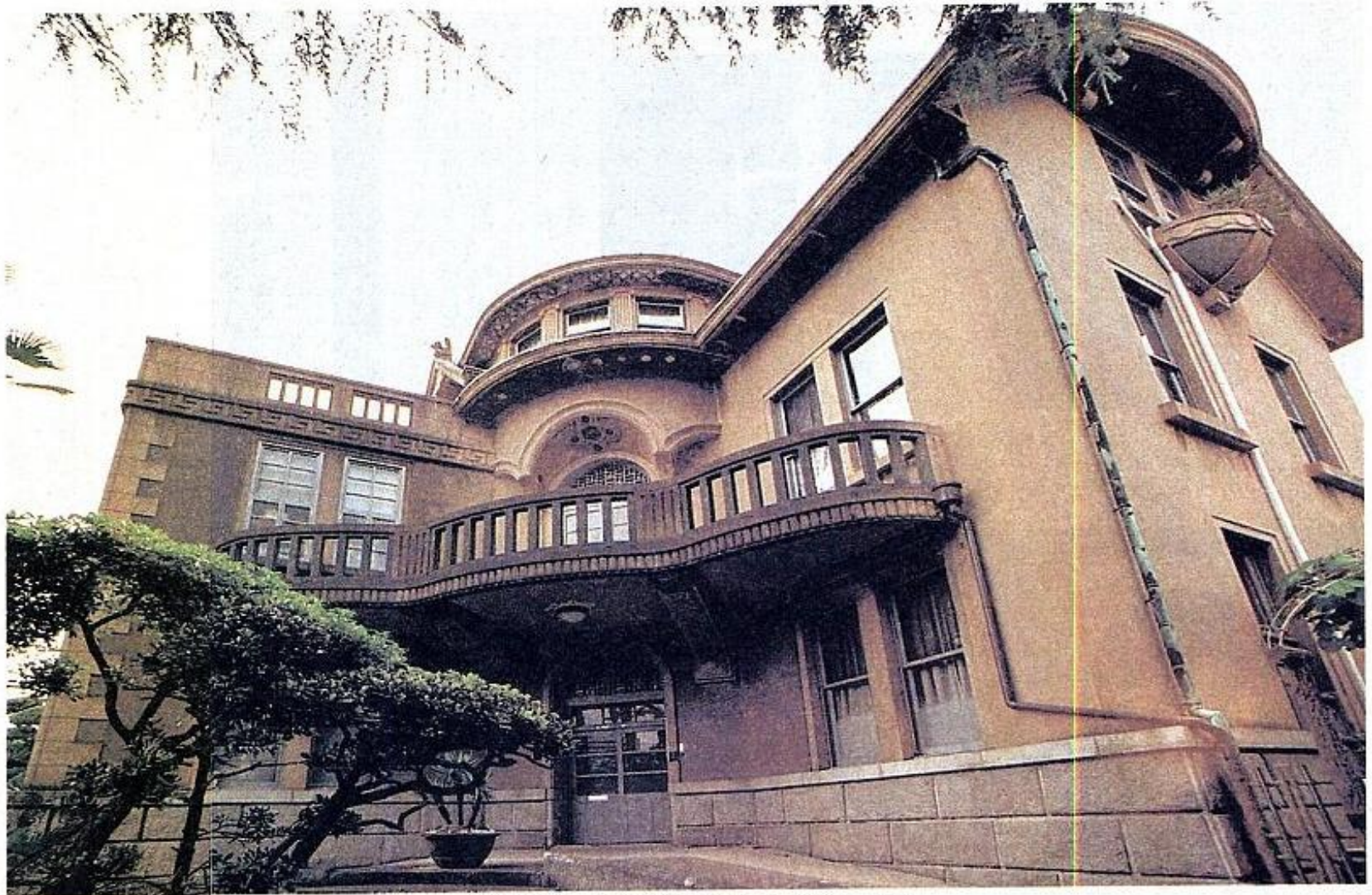
二、写真は末澤弘太

とくしま 見 再 発 見 建 物

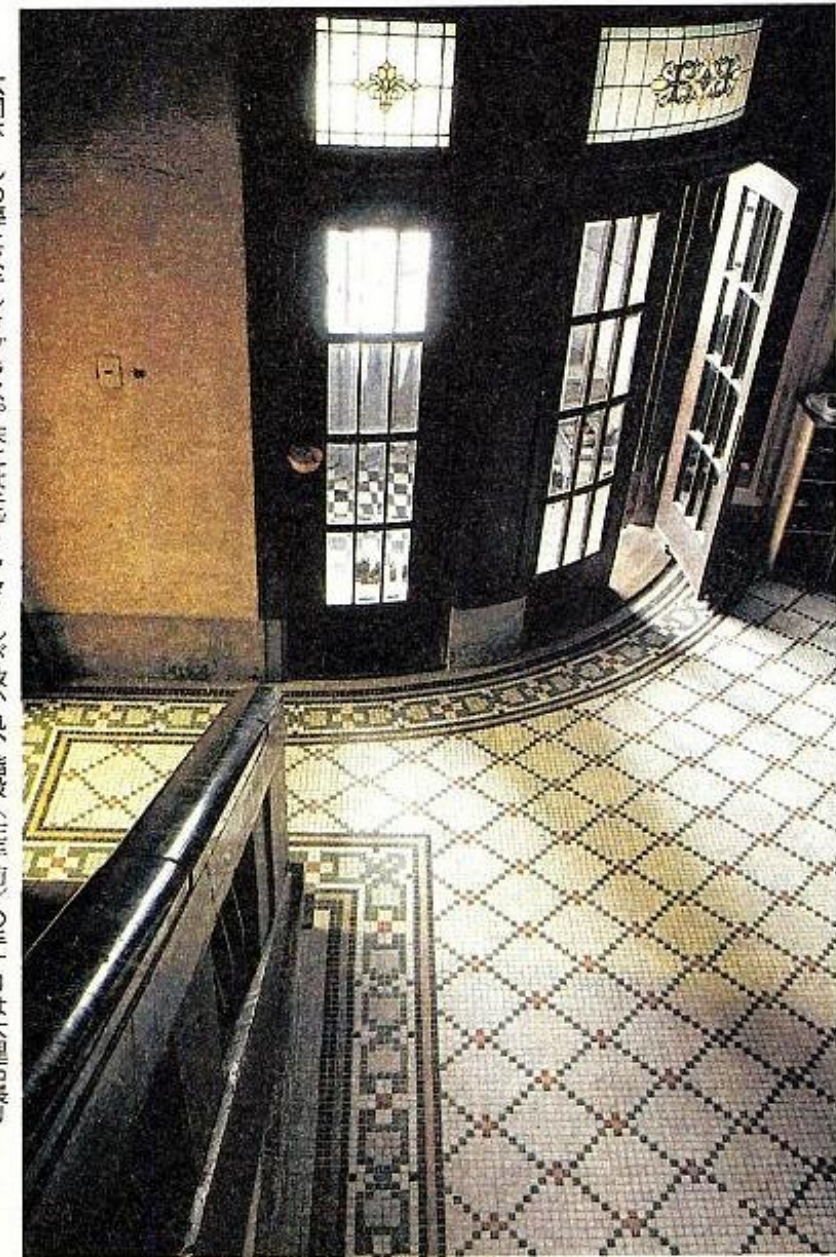
26

徳島市富田浜を流れる新町川のほとり、国道11号のかちどき橋から西を見ると、JR牟岐線の鉄橋の向こうに赤屋根の豪壮な西洋館が見える。一九二八(昭和三)年に建てられた三河邸である。かつて、旧県庁舎としての洋風建築が並び建つ風景は、徳島の近代を象徴する都市景観として、光彩を放っていた。

玄関ホールが改築されてから、この建物は多くの人に「ついで」に、戦前から戦後、そ



半円形アーチが多用されたドイツ風の館



三河邸(徳島市)

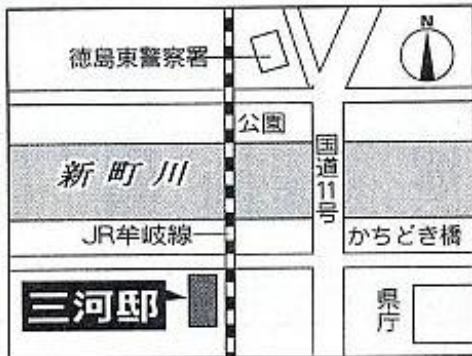
よくに高く評価している。「三河邸の全体は、明らかに十九世紀末のドイツの建物を模したものであろう」

この建物は多くの人に「ついで」に、戦前から戦後、そして現代への記憶をつなぐ数少ない貴重な心象風景のシンボルとな

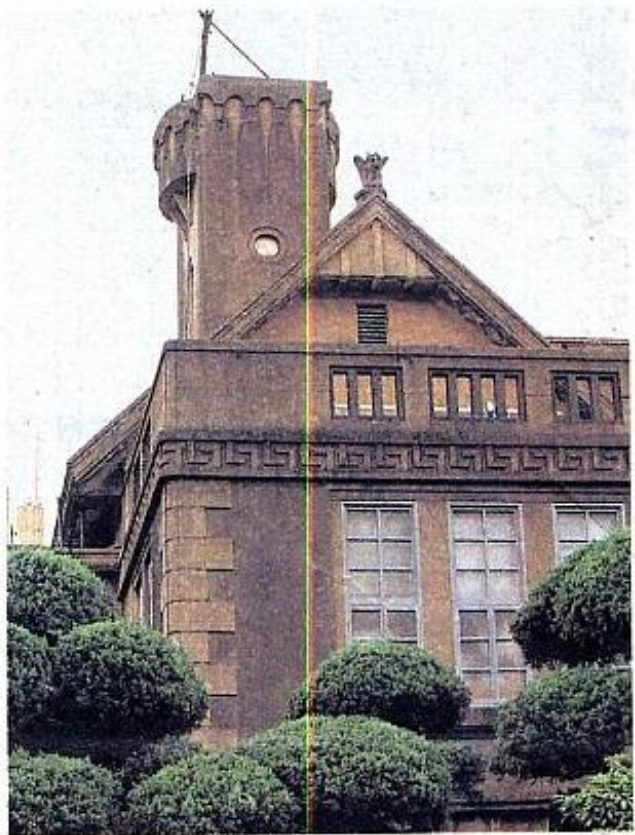
ドイツ的端正と持ち重厚

ら、この建物は多くの人に「ついで」に、戦前から戦後、そして現代への記憶をつなぐ数少ない貴重な心象風景のシンボルとな

田園住宅を手本にして、この庭の豊かなバロック様式風の趣向を、一気に高いアンファールレのようにドラマチックに強調して見せているのが、屋根のつべんに置かれた怪獣像、そして屋根を突き抜けた高々とそそり立つ望楼である。意匠の混交はあるが、たまたまドイツ的な端正さを持ち



「メモ」三河邸 徳島市富田浜4。1928(昭和3)年完成。鉄筋コンクリート3階建て。設計者・木内豊次郎、施工者は不明。



屋根の怪獣像と高い望楼が外観を劇的に演出

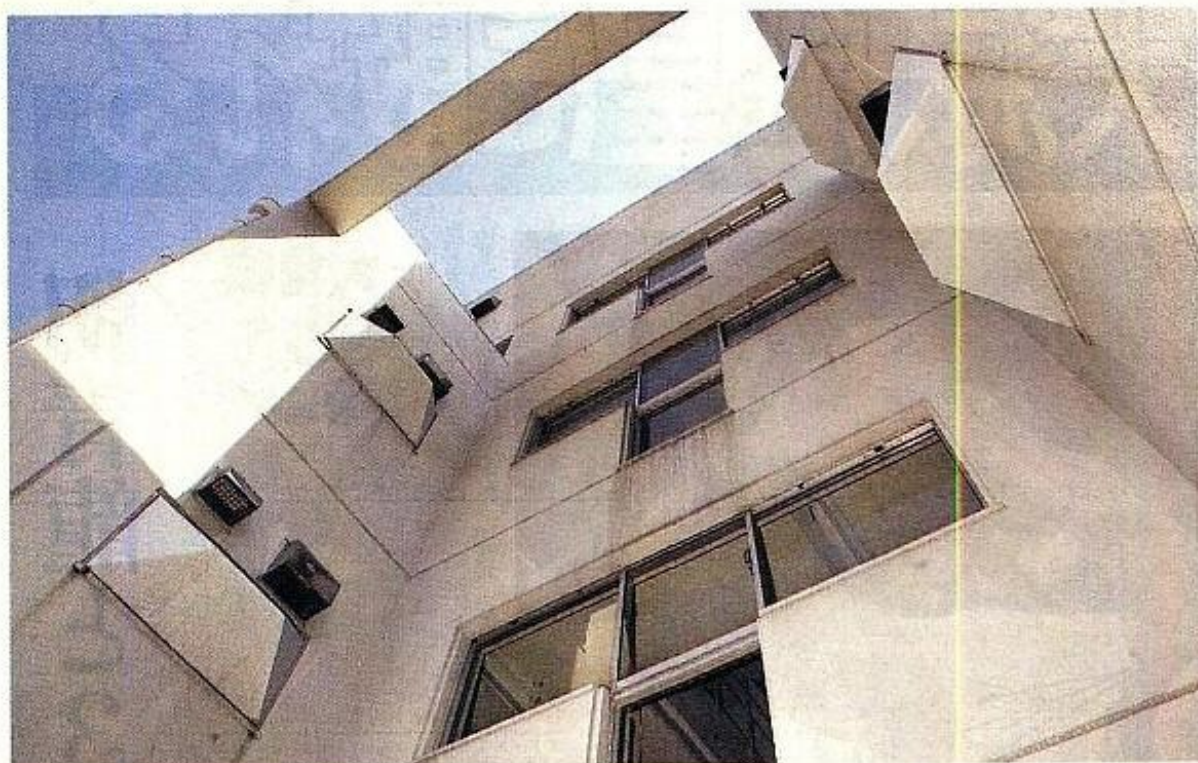
秀な医師であり、狩りや釣りをよく愛した三河義行氏であった。一九二四(大正十三)年にベルリン大学の留学から帰った三河氏が着想し、同時期に徳島工業高校を卒業し、ライプチヒ大学に留学していた交流を深めていた俊英の建築家・木内豊次郎氏が設計した。そのとき、コンクリート造りの家ではなければならぬと思ったという。関東大震災級の地震にも耐えるように「セメントの配合を最も硬くなるようにしてコンクリートを使った」という。

第二次世界大戦で徳島市内を焼け野原にした空襲にも耐えて、コンクリートの壁は今も硬くひび割れもない。鉄筋コンクリート造りの建物として初の国指定文化財になった山田邸(兵庫県芦屋市)の設計者が建築されたのは、五(大正十四)年。その三年後、旧総理大臣官邸と同じ年に完成した三河邸は、日本建築史の鉄筋コンクリート造りの初期に位置する優れた個人住宅であり、今後、県指定の文化財、いずれは国指定の文化財になり得る建築だと思ふ。

「三河邸の全体は、明らかに十九世紀末のドイツの建物を模したものであろう」

「三河邸を建てた家は、二(大正十)年、この大きな家を長年大事に守ってこられた。大変な文化事業であったと思ふ。現在、本体はしっかりしているが、軒先などの一部には傷みが進んでいる。三河邸をこれから文化財としてどのような形で保存継承していくか。徳島の公的都市文化の形成の大きな課題である。(野々瀬徹・日本建築学会会員) 徳島市中徳島町二、写真は末澤弘太

三河邸を建てた人は、僅4土曜日に掲載します。



採光、通風を確保するため、北側壁面の3～5階は吹きさらし空間となっている



無駄のない端正さの中に、人間くささが漂う正面

とくしま 建物再発見

新居ビル(徳島市)

新町橋のたもとの新町交番から、川に沿って二軒目がデザインしたい。「二」の建物新居ビルである。チェアXは、歴史に残る本内外で高い評価を受けて目立つ外観ではないが、建築家を深く知るものには気掛かりなたたずまいとなっている。

新居ビルは、世界的デザイナー・ニューヨーク近代美術館の永久収蔵作品に一九七四(昭和三十九)年に選ばれ、八二年に完成したのがこの建物である。新居氏には中学三年の美術教師から、川に沿って二軒目がデザインしたい。「二」の建物新居ビルである。チェアXは、歴史に残る本内外で高い評価を受けて目立つ外観ではないが、建築家を深く知るものには気掛かりなたたずまいとなっている。

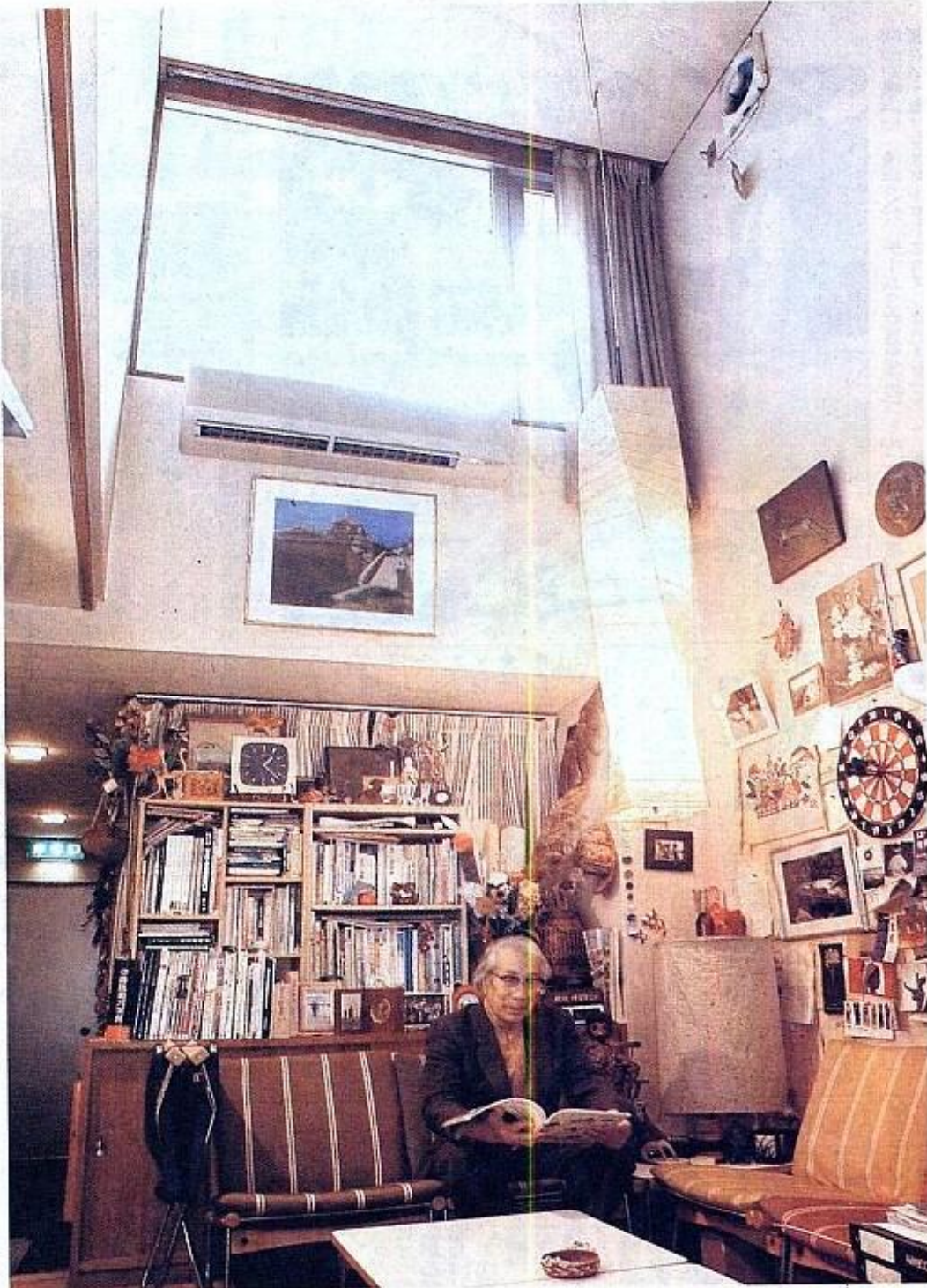
通風や採光に工夫

山口氏は三〇年にベルリン大学に学び、建築家・グロピウスのアトリエメンバールとして、旧ソ連の「ソビエト・パレス」(人民宮殿)の設計などに参加。帰国後、日本の建築界に大きな足跡を残した。師のグロピウスは、近代芸術に大きな影響を与えたドイツの国立造形学校「バウハウス」の校長で、近代主義建築の教科書のような校舎建築の設計者。「思考と感情の率直さ」を大事にした人といわれる。

これは、一見シンプルな表現の中にも人間くさい温かみのある山口氏の建築に引き継がれているように思う。さらに「用途をはっきりさせ、誰にどのように使ってもらうためにデザインするのかを極めること。そして丈夫で安く」という新居氏のデザインの信条とも響き合っていると思う。

新居ビルは、北側壁面の中央部分を凹形にくりぬき、たよな格好で、三階から五階までを吹きさらしの空間にしたことにより、採光などの問題を解決している。空間に面する三階の窓から入る光が、応接兼仕事室の空間を静かに満たしている。また三階フロアに天井が残り、世界で約百万脚使われている「ニールチェア」は、新居ビルの空間によく似合っている。生活に根ざした優れた建築のあり方がここにあり、野々瀬徹、日本建築学会会員、徳島市中徳島町二、写真は末澤弘太

このシリーズは毎月第一土曜日に掲載します。



上部の採光窓から舞い降りる光に満たされた応接兼仕事室

新居氏は六一窓をしつらえ、居間にも光年が注がれる構成を採っている。それを。そして、最も居住する時間が長い応接兼仕事場と居間の外壁から窓をなく、外部からの騒音や視線を防いでいる。上部から舞い降りる光の中の生活は、心地よく落ち着きのあるものとなっている。この空間は思索に集中したり、創作活動したり、くつろいだりするのに適していると思う。



《メモ》新居ビル 徳島市西船場1。1976年完成。鉄筋コンクリート5階建て延べ795平方メートル。山口文象R1A設計(担当者山家啓助(徳島県出身)、清組施工)。

とくしま 見 発 再 建 物

41

県道・松尾住線を走って 叙情をたたくている光景に
いると、緩やかなだ円の弧 足が止まった。
を描いた大きなガラスの壁 この迫力とスケール感の
が夏の青空を 解であること、巨大なガ
背景に現れ ラス壁は物語
た。藍住町合 張りである。このように徹
同庁舎だ。道 して各階が見える。この視
路から庁舎ま 線のおかげにより、各階
での間に扉は 付き内部広場」という名
なく、彫刻が 前にオフィス
置かれたアプ に設けられる
ローチ広場と ことも多く、
駐車場のみ 大都市など
で、その平たんなオープン は珍しくはな
スペースから建物前面のガ いかもしれない
ラス壁が垂直に立ち上がっ 大規模再開発施設や、
ている。極めて即物的でシ 「アトリウム(ガラス屋根
ンプルな外観である。 付き内部広場)」という名
一般的には、和紙や土の 前にオフィス
自然素材を使って自然感の に設けられる
ある空間はつくられる。ガ ことも多く、
ラスや鉄の工 大都市など
業製品は無機 は珍しくはな
でいくようなコスミックな いかもしれない

藍住町合同庁舎

空に溶け込むガラス壁

あるガラスの表現は、光と
ともに呼吸するような流れ
つで新しい自然感覚を表し
ている。

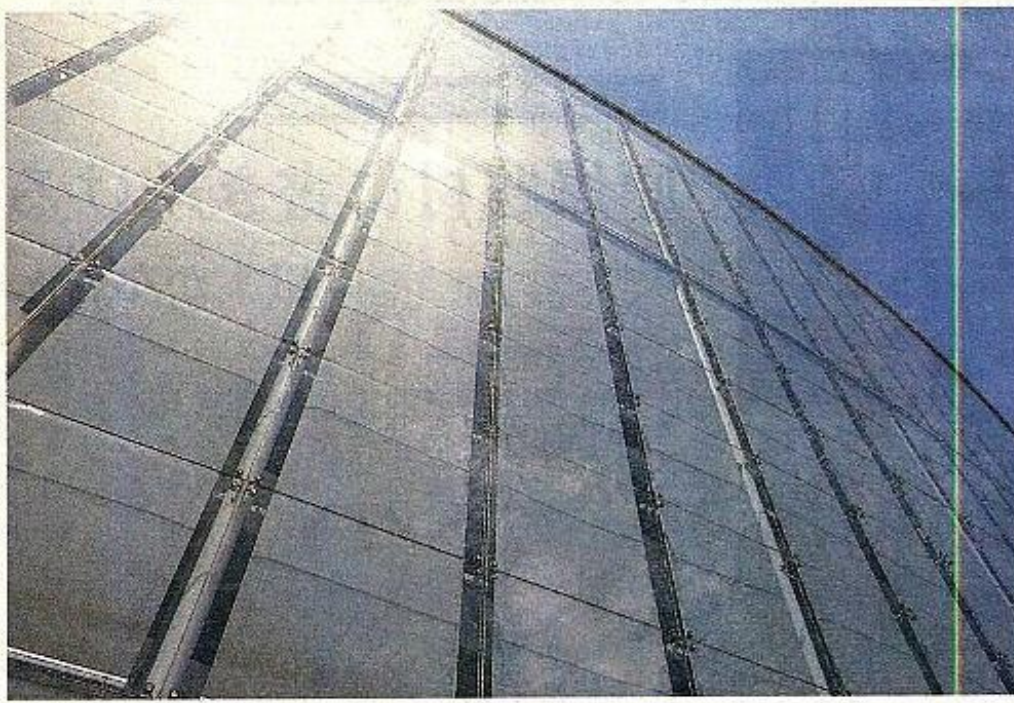
一般的には、和紙や土の
透明ガラスでつくられた
ひさし・風よけ室を通り抜
けて中に入ると、そこは六
階まで垂直に吹き抜けた広
い町民ホール。その頭上高
くにある屋根も透明ガラス
シッター、議場などが配置
されている。吹き抜けを通
じて各階が見える。この視
線のつながりにより、各階
の光の壁を見
れたホールは、光で満たさ
れ、明るく軽やかな開放感
各室での活動と多少なりと

の壁である滝を見ていると
きに味わうのと同じよう
な、自然と一体になった心
地よさを感じる。

を醸し出し、心地よいそら
快感で人を迎え入れる。
巨大な吹き抜け空間の上
部には、吉野川の清流をイ
メージしたオブジェ「悠久
流水」がつるさされている。
吹き抜け空間について少
し考えてみよう。垂直性を
強調した吹き抜けの例とし
て知られてい

るの、西洋
のキリスト教
会の聖堂(カ
テドラル)が
ある。それは
バラ窓のステ
ンドグラス越
みやすさ、オーブン性、公
正な明瞭性などを比喩では
なく直接的に空間化してい
る。吉野川の清流のような
伸びやかでさわやかな庁舎
建築である。(野々瀬徹・
日本建築学会会員)徳島市
中徳島町二、写真は末澤弘
太)

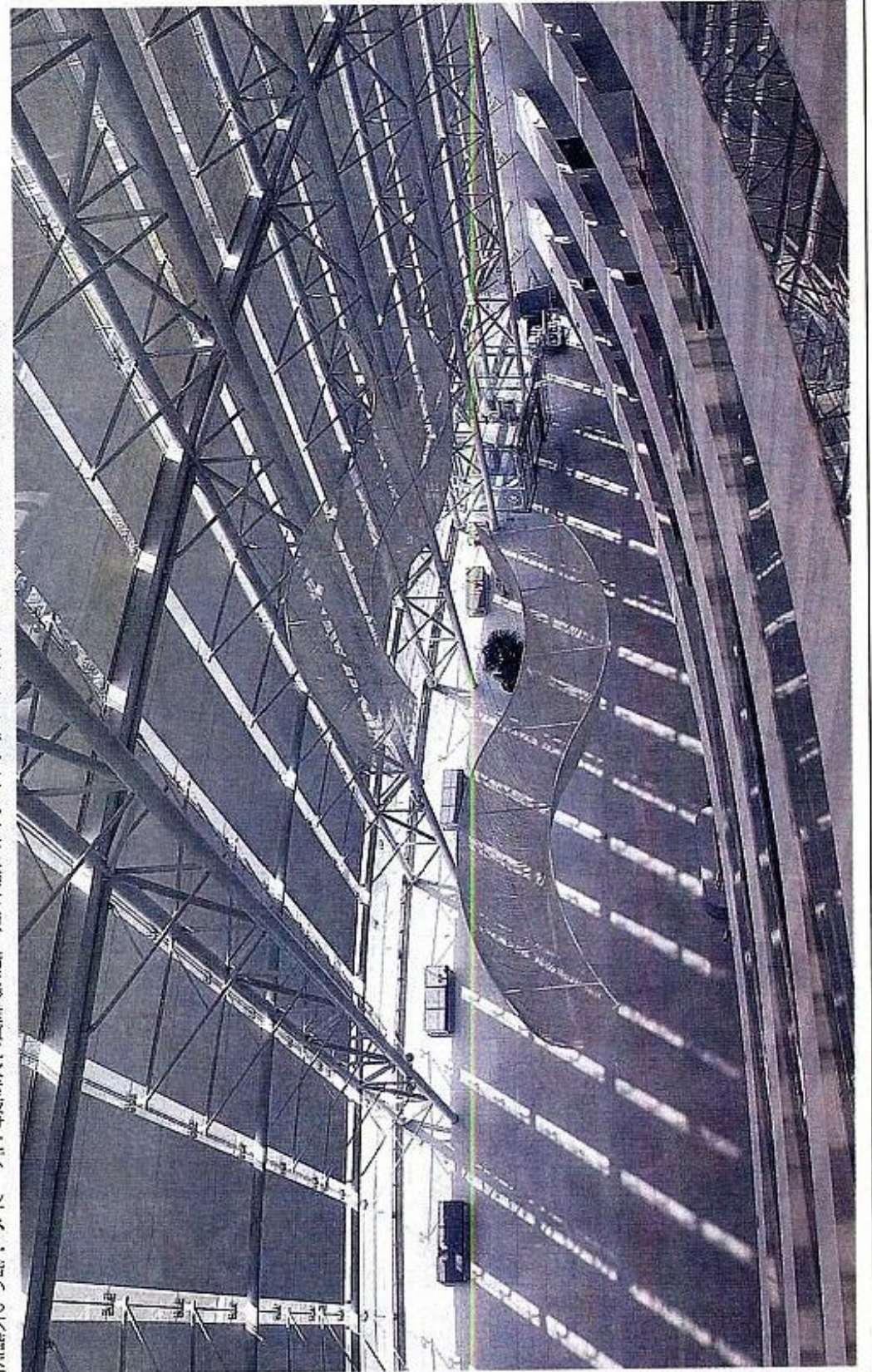
このシリーズは毎月第
2土曜日に掲載します。



空に溶け込むような巨大なガラス壁

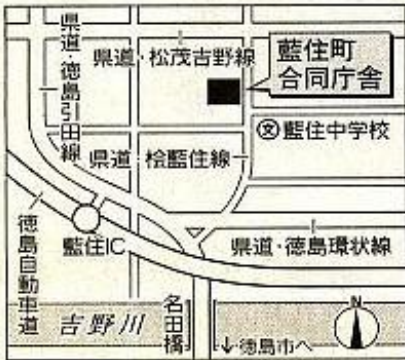


光る庁舎が夕暮れの藍住町に映える



6階まで垂直に吹き抜け、明るく開放感のある町民ホール

藍住町合同庁舎 藍
住町奥野。1998年
落成。鉄骨鉄筋コンク
リート地上6階、地下
1階、延べ7121平
方。梓設計大阪支社
設計、熊谷・青木建設
共同企業体施工。
ガラス壁やガラスひ
さしの工法 透明感を
強調したガラス壁とす
るために、ガラスを皿
ボルトなどで支持部材
に直接取り付け、点支
持工法を採用(従来の
ようなガラス支持のた
めのサッシを使ってい
ない)。

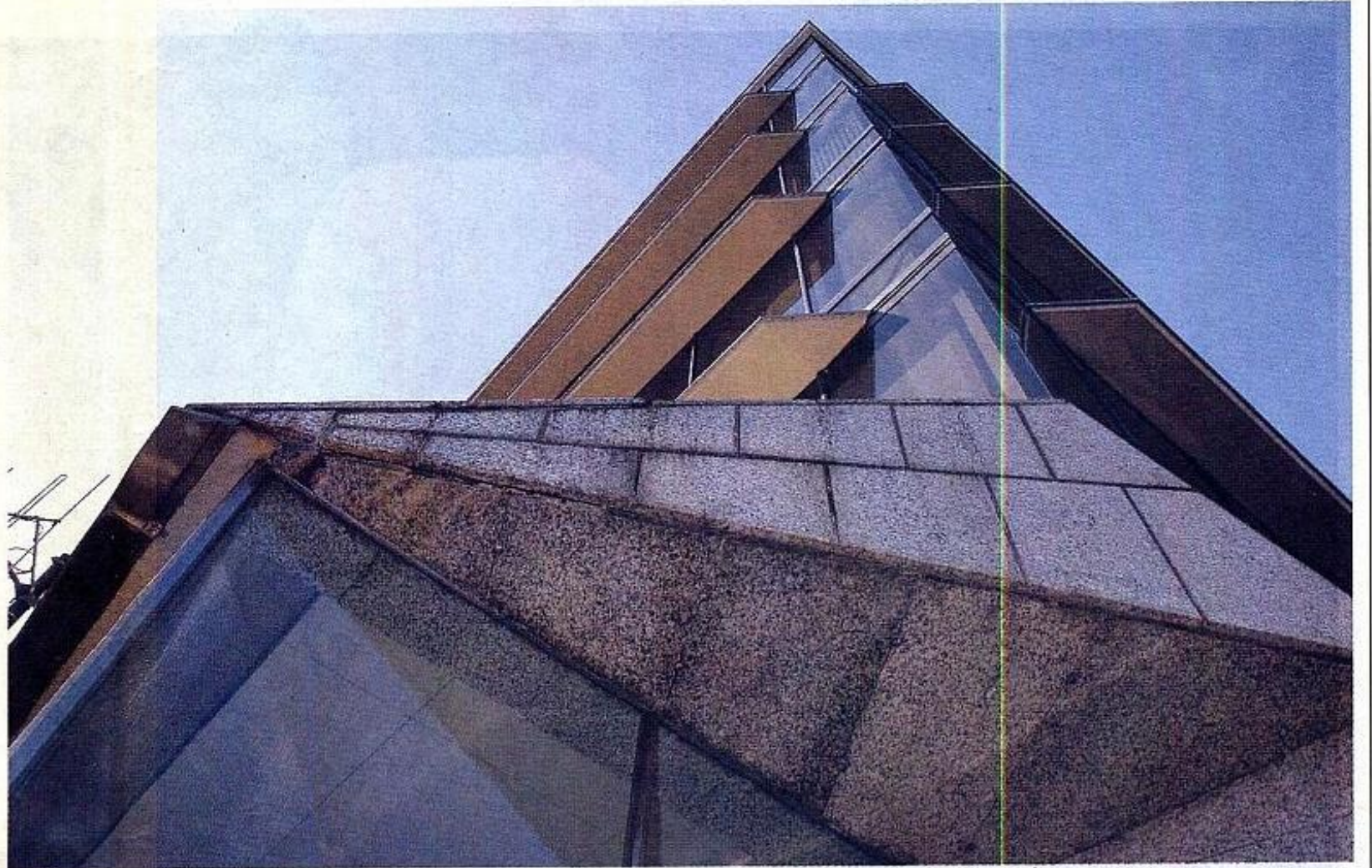


△×モ

とくしま 見 再 発 物 建

新町橋を眉山に向かって渡るとき、右側に川に面して清々としたすむグレイのガラス張りのビルディングが見える。明治安田生命徳島ビルだ。築後三十数年を経ているが、いまなお斬新モダンな叙情を保ち、最近完成したといわれても何ら違和感がない。

外観の特徴は、石張りの一階の上にガラスの軽快な箱をポンと載せたような、対比を効かせた構成にあ



石張りの基壇、ガラスの塔、ひさしの緻密な構成



仏塔をモチーフにデザインされた現代のオフィス塔

る。この建築を見ていて、ふと五重塔などの仏塔建築が浮かんだ。

仏塔建築形式 巧みに

明治安田生命徳島ビル(徳島市)

五重塔は石積みの基壇の上 った屋根を持つ塔をポンと 載せた格好になっている。建築構成の現代版と見立て

作の基本的な方法であるが、力量が伴わず、アイデア倒れに終わることが多い。このビルは数少ない成功例の一つだろう。

基壇に当たる一階は、大

塔に当たるガラス箱の構成は緻密、周到である。東西両面壁面比べて幅が広い南(新町交番側)壁面は、縦方向に切れ込みを入れて三分割し、垂直性を高めている。これにより、あたかも三つの塔が連続して立っているかのように見える。

さらに水平方向には、各階の床のコンクリートをガラスの壁面を越えて外部に突き出させ、横長の薄いひさしとしている。ガラスに

地にとっしりと根付いた重量感が欲しいところだ。このビルの一階壁面はすべて御影石張り。さらに入り口になっている開口部分で壁に傾斜を持たせたり、御影石張りの屋根を張り出した

りしてボリュームを拡大し、一階を硬質で重みのある塊とする。

このビルは、現代日本の巨匠建築家の一人、出江寛氏が竹中工務店に在籍していた三十年代後半の作品である。同時期、徳島には末広プラザポウルとその前のM邸も設計している。いずれも「伝統と創造」の探求を続けてきた京生まれの出江氏ならではの秀作である。

出江氏は、現代の教習屋建築のあり方を提示して日本建築史に大きな影響を与えた「ペンキの教習屋」から、鏝のひだをモチーフにデザインした瀬戸大橋の四つの橋台まで多岐にわたる創作活動の中で、一貫して日本建築の「粋」の美を創造してきた。

このビルには出江氏の魂がこもっている。私を感じている。(野々瀬徹・日本建築学会会員)

徳島市中徳島町二、写真(は末澤弘太)

このシリ

ースは毎月第

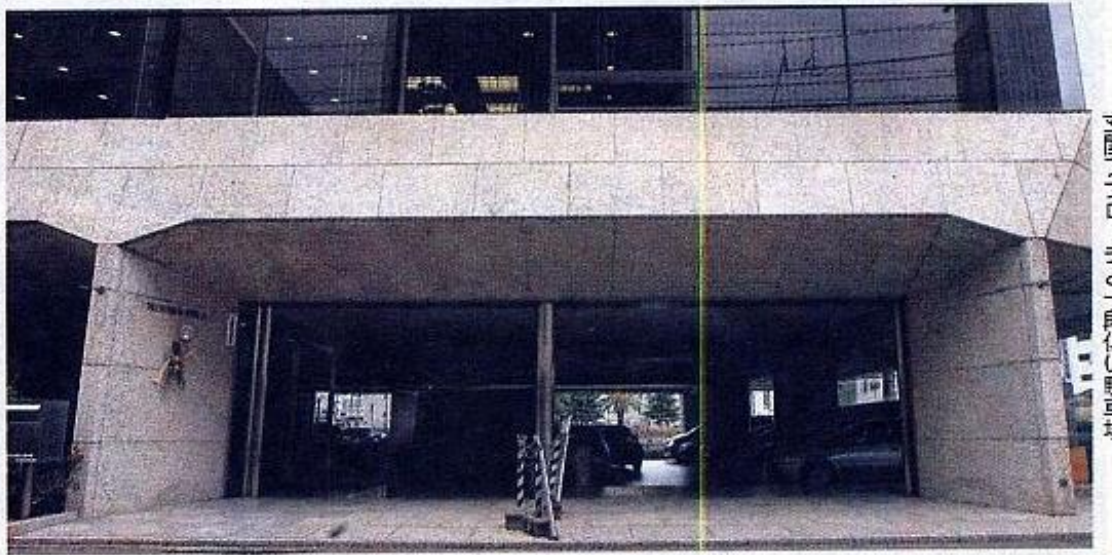
2土曜日に掲

載します。



明治安田生命 徳島ビル

玄関アプローチと一段低い駐車場



囲まれて澄いたように見えるこのひさしが、塔の屋根をイメージさせる。ガラスの色は深みのあるグレイを選んでいる。これは長年、日差しや風雨にさらされて淡い銀色となった仏塔の木の色を思わせたいだろうか。

形も色も日本建築の深い伝統をベースにし、その精神性を継承しながらも、表面にはあからさまに出さず、現代の素材やモダンな美意識をたたえた現代建築として昇華させている。このような哲学性を持った建築手法で造られたがゆえに、三十年を経た今も古びず、今後も年月を越えてモダンであり続けることを予感させる。

もう一つ、一階の玄関アプローチと駐車場の処理に注目したい。駐車スペースの床をアプローチの床よりもスロープを設けて意図的に四〇センチほど下げている。機能上は同じ高さでも、そのほうが工事も簡単だったはずだ。

しかし、このレベル差をつけることで、駐車した車の屋根を来訪者の視線よりも下げ、無粋で陰気な駐車場を見せながら招き入れるのではなく、その向こうの新町川に視線を誘導することに成功した。こうした細部にまでデザインと工費を惜しまなかったところは見事だ。

日本のレベルの優れた建築に授与される「建設業協会(BCCS)賞」を受賞したこのビルは、現代日本の巨匠建築家の一人、出江寛氏が竹中工務店に在籍していた三十年代後半の作品である。同時期、徳島には末広プラザポウルとその前のM邸も設計している。いずれも「伝統と創造」の探求を続けてきた京生まれの出江氏ならではの秀作である。